

東林木町の「前口」集落は、都我利神社の眼下に広がる集落です。

戦後、「前口」集落は西と東に分かれ現在に至っています。

古老の話しでは「前口」は東山の前の方に集落があるから「前口」だと言われましたが本当は何を基準にして前なのかはわかりません。

しかし、天平五年（七三三）に編集された「出雲国風土記」の「出雲郡」に記された「伊農の社（都我利神社）」や、延長五年（九二七）に完成した「延喜式」に列記された「都我利神社」は古来から地区の人々が崇敬していた神社だったという確証ではないでしょうか。

おそらく、昔の住民達は、その神社の前にある集落を「前口」と言ったのだろうと推察されます。

明治時代には、「前口」集落には、圓福寺や長昌寺があり、伊丹堂へ行く道沿いには伊佐波神社がありました。

その後、圓福寺は玉泉寺へ、長昌寺は万福寺へ吸収合併され、伊佐波神社は都我利神社に合祀されました。

最近になって、その伊佐波神社跡地（青木遺跡）から、奈良時代の神社施設を持つ遺構や文字資料の遺物を持つ役所跡が発掘されました。

また、明治の初期の頃、長昌寺には林木村の戸長役場があり、都我利神社前には林木小学校が新築されていたとの記録があります。

このように「前口」は、林木村の中核になっていた集落であったものと考えられます。

